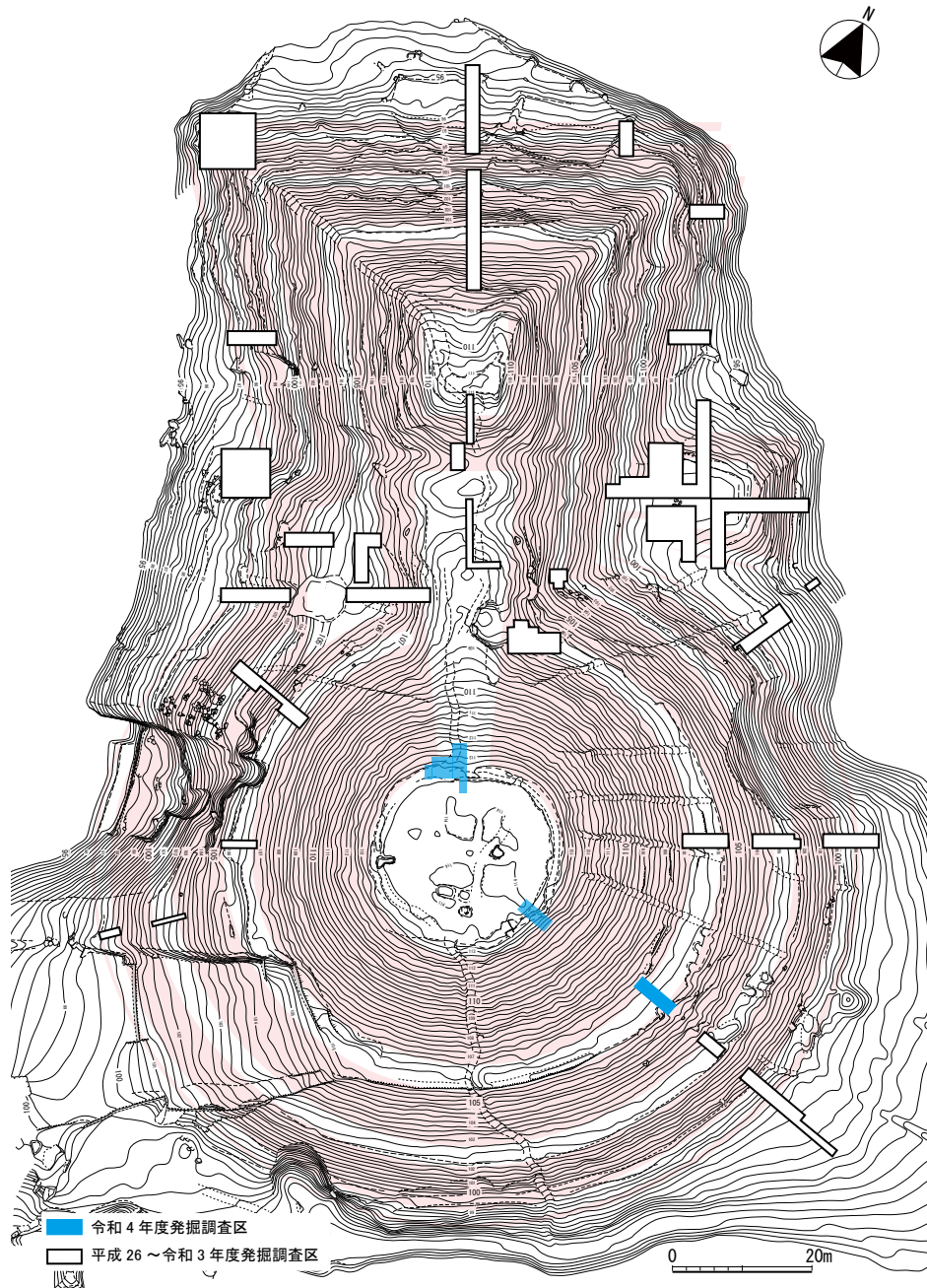


かな くら やま こ ふん
金 蔵 山 古 墳

範囲確認調査（第9次）現場公開資料

古墳の概要

金蔵山古墳は操山丘陵のほぼ中央、標高100mほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長約158mといわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳が築かれる前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品があり、昭和28年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われ、2基の竪穴式石槨やそれらの上部に方形埴輪列をともなう区画がみつかり、多種多様な副葬品や埴輪類が出土しています。現在、古墳全体が山林となっていますが、岡山県を代表する古墳のひとつであり、墳丘の外表施設や埋葬施設などの遺構、副葬品や埴輪などの遺物は学術的・学史的に非常に重要で価値が高く、保存や活用を図っていくことが課題となっています。



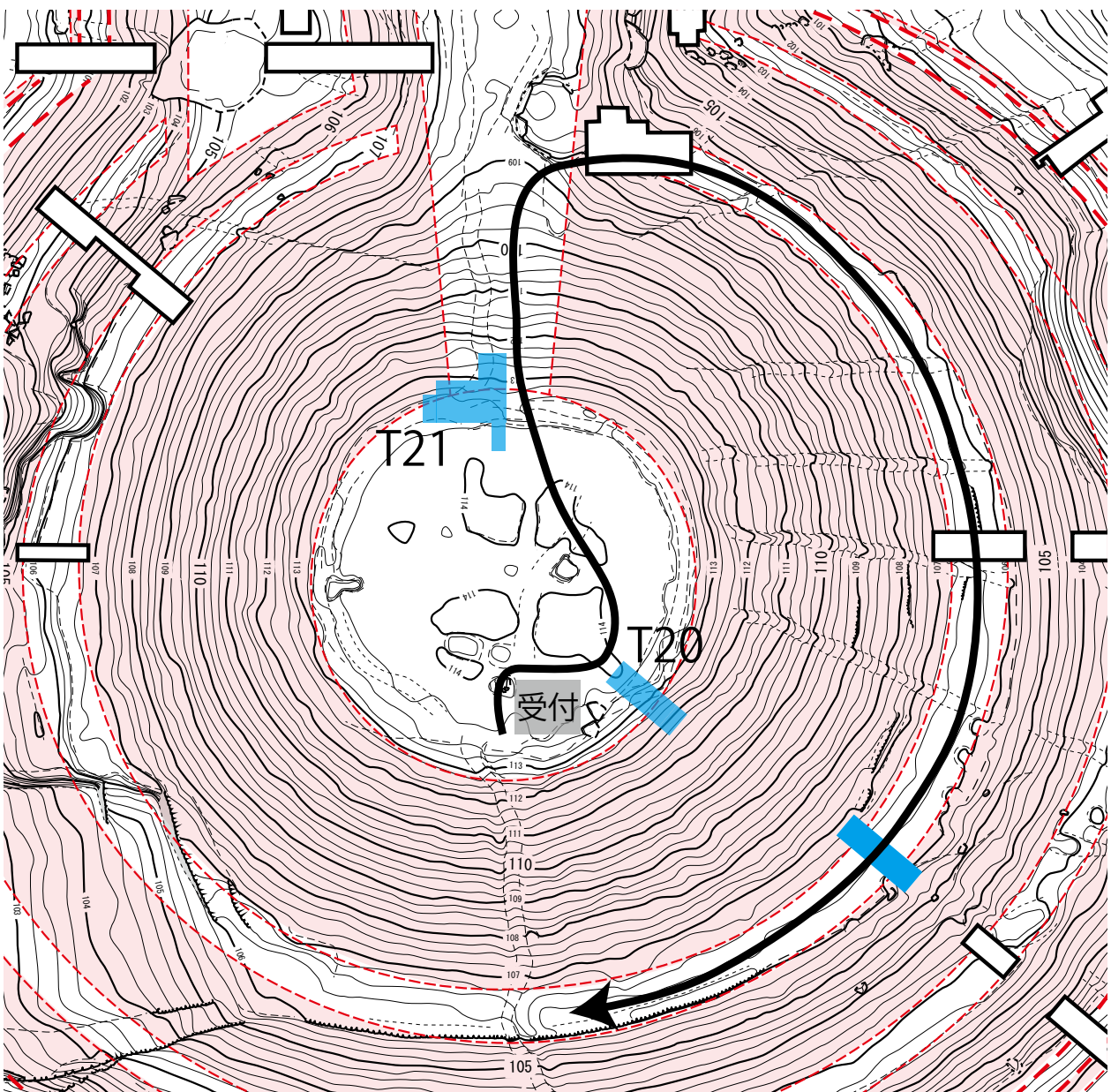
金蔵山古墳の概要と調査区の位置

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では古墳の墳丘の規模、形態、構造を追求し、将来的には史跡指定等の保護の措置を図っていく計画で範囲確認調査を実施しています。これまでの調査では、西側のくびれ部に造り出し、前方部の東側に島状遺構が付属することや、くびれ部から前方部にかけての墳端や墳頂の状況の詳細が分かってきました。その際に出土した埴輪は、量や内容ともに充実したものとなっています。

令和4年度調査成果

昨年度に引き続き後円部の調査を行いました。後円部の墳頂、三段に築かれている古墳の最上部にある平坦面（テラス）や斜面上に調査区（トレンチ）を設定しています。過去に倉敷考古館によって墳頂部の調査は行われていますが、斜面寄りの部分については未調査です。

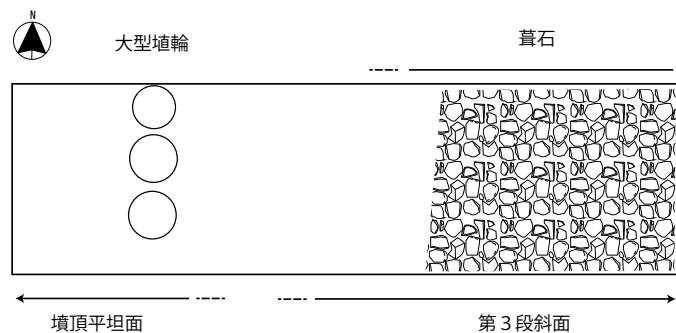


調査区の配置と見学ルート

トレンチ 20-1

後円部の墳頂の東側にある調査区です。墳頂平坦面及び第3段斜面の検出を目的としました。斜面寄りの墳頂平坦面からは、大型の埴輪が3個体出土しました。径は45～50cm程度で、残存高は20cm程度です。金蔵山古墳の円筒埴輪は底径が25cm程度で高さ約50cmの3条4段構成ですが、今回出土した個体はこの例にあてはまりません。墳頂部分は特別に径の大きなものが用意されたと考えられます。周辺で盾形埴輪の破片が出土したことから、盾形埴輪が含まれていると考えられます。斜面部は葺石が良好な状態で残っていました。葺石の一部は盛土で埋め殺しにしています。斜面上部付近では、盛土内で角礫が集中してみつかっています。ある程度斜面を成形してから、葺石を施し、その後に土を盛り、墳丘を築きながら埴輪を埋置させるという工程が復元できます。

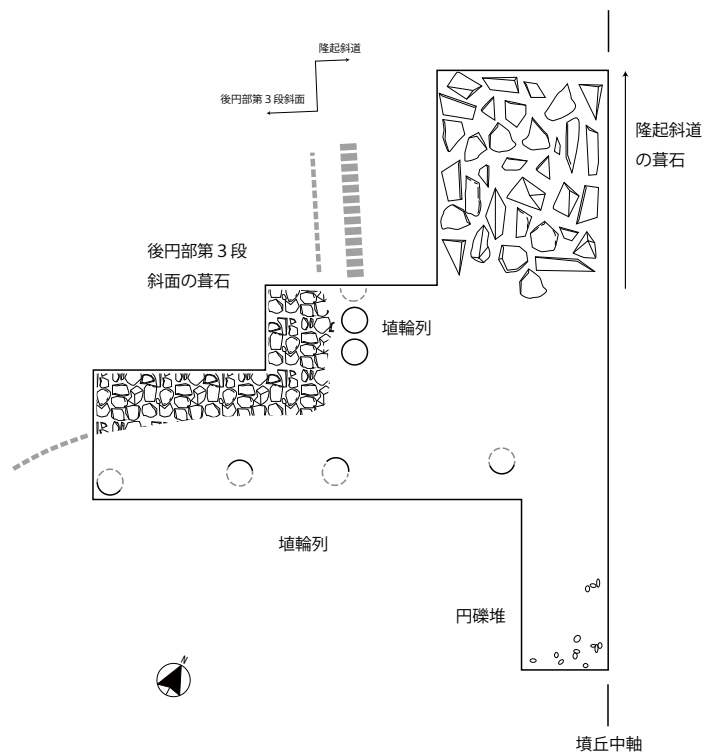
トレンチ 20-1 の1つ下の段の平坦面でも調査を行っています。このトレンチでは、葺石や円礫堆、埴輪列などの検出が期待されます。



トレンチ 20-1 模式図

トレンチ 21

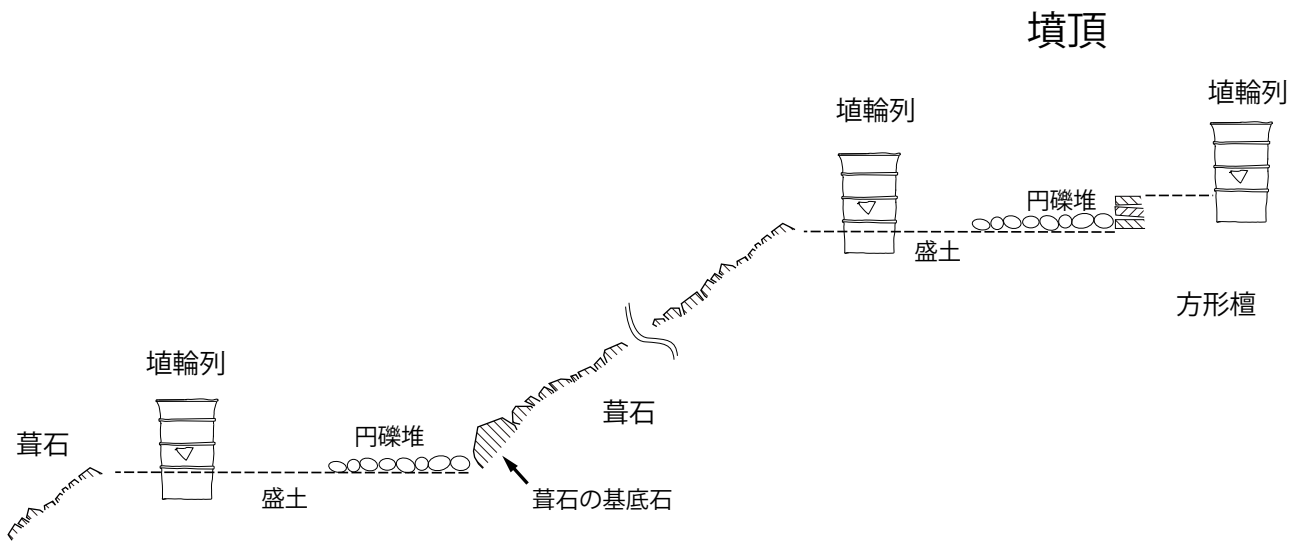
後円部の墳頂平坦面と前方部へとつながる斜面の検出を目的としました。墳頂平坦面部分は盛土が流出しており、築造当時の平坦面の残存状況はあまりよくありません。円礫堆もわずかしか残っていませんでした。埴輪は基底部がわずかに残る程度で、種類や大きさは判然としません。後円部第3段斜面の葺石の残存状況は良好で、トレンチの半ばで前方部方向へと折れ曲がる様子が観察できます。後円部の墳頂から前方部へと至る斜面では、埴輪と葺石がみつかっています。埴輪は密に並べられており、前方部方向へと伸びていきます。埴輪より内側には、第3段斜面部よりも疎な間隔で石が葺かれていました。また、傾斜自体も緩くなっており、同じ葺石でも目的が異なることがわかります。



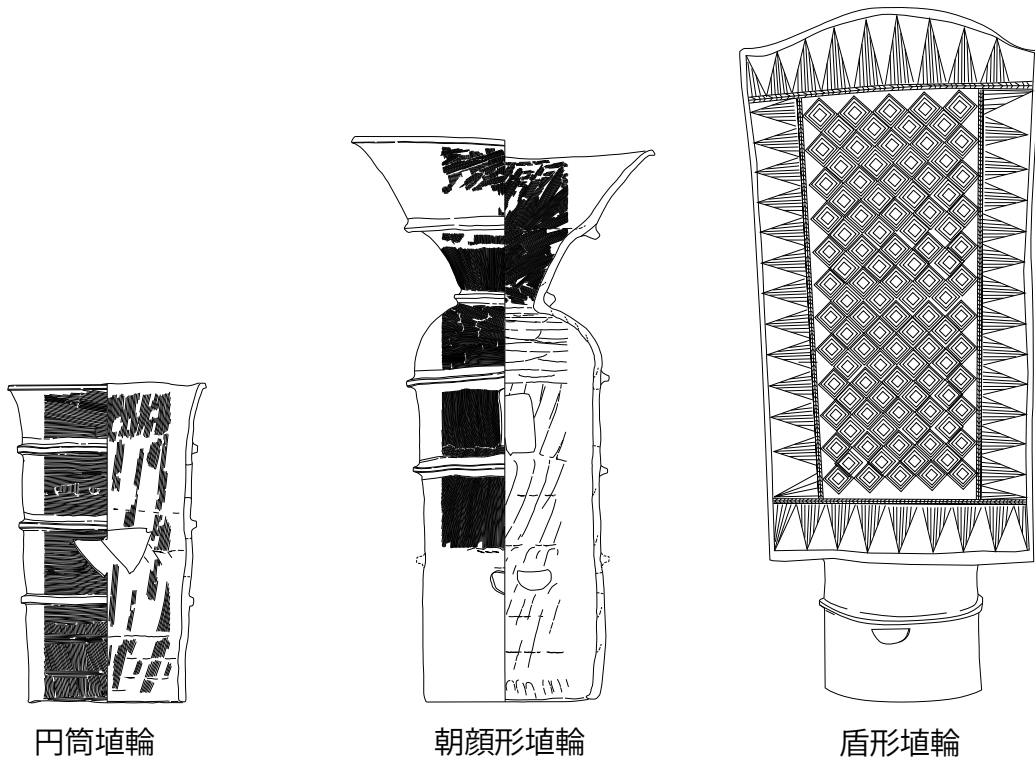
トレンチ 21 模式図

まとめ

後円部墳頂の調査では、墳頂から第3段斜面までの状況が明らかとなり、これまでの調査成果と合わせ、墳丘を復元するために必要なデータが揃いつつあります。墳頂平坦面に並べられた埴輪は、両トレンチ間で様相が異なりました。埴輪の種類や大きさ、樹立間隔がなぜ異なるのか今後の課題として残りました。斜面部分はT21では後円部第3段斜面と隆起斜道との境が良好な形で残って残っていました。今後、出土埴輪の検討に加え、畿内中枢部の王陵を含めた他古墳の例との比較を行い墳丘構造にみるつながりを検討していくことも肝要となります。



墳丘構造の模式図



埴輪列中の各種埴輪